

【ポスターセッション】

**精神保健福祉領域におけるソーシャルワーカーの自己生成プロセスに関する研究
—変容の基軸及び発達段階における専門職業的自己の生成プロセスの特徴—**

聖隷クリストファー大学 福田 俊子 (569)

村田 明子 (聖隷クリストファー大学・8207)

須藤 八千代 (愛知県立大学・4562)、吉川 公章 (福井県立大学・4281)

キーワード：ソーシャルワーカー・自己生成・技能習得

1. 研究目的

ソーシャルワーカーがいかにしてソーシャルワーカーたる専門職となるかを明らかにした実証的研究については、PSWの援助観に着目した横山(2004・2008)やMSWを対象としその実践能力の変容に焦点を当てた保正(2011)による研究がある。社会福祉分野では2000年以降にこれらの研究がなされているのに対し、看護・教育分野では、H.Dreyfus&S.Dreyfus(1986)による5段階の技能習得モデルを適用したP.Benner(1984)の研究成果を軸に、専門家としての成長・発達に関する研究が1990年代から蓄積されている。

本研究では、Bennerによる技能習得の5段階発達モデル(初心者・新人・一人前・中堅・達人)をソーシャルワーカー(以下、ワーカー)へ適用することの可能性を探ると同時に、①発達段階を形づくる指標を明らかにし、②各発達段階における時間的な区切り、③各発達段階における指標の特徴や指標相互の関係性を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

Bennerは、プリセプター制度を採用している3カ所の病院から選ばれた21組の看護師ペアを調査対象とし、臨床事例に関するインタビューを中心に調査を展開している。

本研究では、先駆的な精神保健福祉活動を展開している地域の精神保健福祉士資格を持つ17名を対象にインタビュー調査を行った。対象者の所属機関は、医療機関2名、障害福祉サービス事業所14名、行政機関1名であった。男女比は、男性9名、女性8名、臨床経験年数の平均は約11年で、最短0.5年、最長38年であった。

インタビューは、BennerらによるGuideline for Recording Critical Incidentをもとに作成した調査票に対象者が予め記入した「重要な臨床体験」に基づき1名につき2回(1回1時間程度)実施した。調査は1回目が終了した約半年後に2回目を行い、調査者の組合せ考慮し、内容が偏らないよう2名1組とした。調査時期は、2006年8~9月及び2007年2月に8名(第1期)、2007年11月及び2008年3・8月に9名(第2期)であった。

録音データは全てテキスト化し、Bennerが用いている現象学的アプローチで分析した。

3. 倫理的配慮

本研究は聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究結果

データ分析の結果、指標となる3つの概念、①見立て・予測、それに基づいたかわり、②専門性の捉え方（下位指標として「専門家としての自己の捉え方」「専門職の役割に対する捉え方」）、③振り返りの方法（下位指標として「他者の助言の活用」「振り返りの視点」）が抽出された。看護職とは異なり、ワーカーの自己生成プロセスにおける変容の基軸は「技能」として捉えられる指標（指標①及び③）だけでないことが明らかになった。

5. 考察

初心者・新人レベルは、技能習得が中心的な課題となる時期であると同時に、専門職業的自己（professional self）が確立される前段階に位置づけられ、「技能習得を通じて専門職業的自己の形成がはじまる時期」となっている。したがって、指標①及び③は明確に基軸として抽出されるのに対し、指標②は抽出されることはなかった。そして、このレベルのワーカーの臨床経験年数は看護職と合致する結果となり、両者は同様のペースで成長していくと捉えられた。また、初心者レベルから新人レベルへ移行する際には、省察の方法に変化が見られ、スーパーバイザーの存在が不可欠であることなども明らかになった。

一人前レベルは、一定の技能習得がなされた「専門職業的自己を確立する時期」であり、このプロセスは看護職と比較すると時間をかけて進行していた。臨床経験年数からみると教師のモデルにより近く、このレベルに相当する期間も長く、前期及び後期の2段階に分けられた。前者では、指標①で「障害特性」「対人関係」のどちらか一方による対象理解がなされるのに対し、後者になると双方の視点にたった理解へと変化する。

中堅レベルは、専門職業的自己が確立し、専門職のあり方について自分なりの考え方が存在し、表現されるようになり、初心者・新人レベルでは現れてこなかった指標②が、明確な専門職業的自己を生成する基軸となっている。指標①においては、一人前レベルの2側面だけでなく、Bennerがいう「状況のニュアンス」を捉えながらの対象理解へと変化し、指標③でも、振り返りの視点が対象者個人だけでなく、地域支援システム、方法、政策、法制度へと拡大する。そして、専門職業的自己と個人的自己の不一致による矛盾と向き合った結果、ワーカーとしての無力や限界に気づき、「両者の結合」がなされる。

達人レベルでは、実践は感覚でなされるようになる。専門職業的自己と個人的自己という区別はなくなり、「両者が一体化」し、自己は二つに区別されなくなる。つまり、指標②はこのレベルで再び消失するのである。そして、資格制度のない時代から、臨床経験を積み重ねてきた経歴を有する達人レベルのワーカーは、自分の臨床経験を支える「仲間の存在」であったと言い、また、まるで新人ワーカーのように「素朴な表現」で自己を語る。これらの語りは何を意味しているのだろうか。

今後は、専門職業的自己と個人的自己の一体化がなされる達人レベルのワーカーを対象とし、ライフストーリーの視点を加えたインタビュー調査を実施することで、さらなる考察を深めていきたいと考えている。